

あるが、果して何時であつたか分らない。口賦 人頭税が特に算賦と呼ばれるやうに爲つたのも口といふ名稱は、必しも幼年者の人頭税を意味しない。賦が添設されて彼此相區別する必要が起つてからいけれども、便宜上此の名稱を用ひて算賦と。區 別の事であらう。初は單に賦と呼ばれた成人の

チエルスキ族の興廢に就いて

— 羅馬帝國の對ゲルマニ政策に關する一研究 —

文學士 植村清之助

求めたが、彼等は爾來ケーザルの命に應じて專敵
情偵察の任に當たることとなつた。其報告中に、

スエビ (Suchi) 當時ライン河畔一帯の地に蟠居し腰カリヤ方面に侵入し來れるゲルマニ中の一大族團であつて

この族團を目標として居るものである。) は遠く邊境のパケ

ニス・シルワ (Baennis silva) 通常今日のハルツ (Hartz) 地を指すものとせられて居る。

迄退却して、この險要に據り死力を盡して羅馬軍

と相闘ふ用意を整へて居る旨を告げ、且つこのパ

ケニスの森林はスエビとチエルスキ族との境界を

チエルスキ (Cherusci) の名は既に夙くケーザルのガリヤ戰記中に見えて居る。⁽¹⁾紀元前五三年ケーザルが再度ラインを越えてゲルマニ内地に攻め入つた時に、其頃からゲルマニ種族中無二の親羅馬派であつたウビー族 (Ubi) は恐懼して忽急使者を遣はし、忠誠を誓ひ征軍を勞ふて只管其歡心を

なして居るもので、兩族の争議衝突を防止する天然の障壁であるといふことを述べて居る。これがガリヤ戦記中にチェルスキ族のこの現れて居る唯一の箇所で、是丈の記事では只彼等部族の占住地方をあらかた推想することが出来る許であつて其勢力境遇他族との交渉などに就いては殆ど知る途がないのである。ライン地方とは隔つた北獨ウエーゼル河以東に占居して居た該部族は、勿論ケーザル時代に羅馬と直接交渉を生ずるには至らないから、従てガリヤ戦記に彼等に關する何等委細の記事が出て居ないのは訝しむに足らないことである。而も後年ゲルマニ諸族間の盟主として自由獨立の民族的精神を發揚したチェルスキの名が既にガリヤ戦記中に只一度出て居るといふことは、ケーザルが羅馬に不測の災厄を蒙らす未來の讎敵を何となく隱微の中に豫告して居るやうで、興趣殊更深きを覺えるのである。

アウグスツス帝時代に至つて羅馬の對北蠻經略は非常に活潑となり、ドルツス(Drusus)チベリウス(Tiberius)の兩將相繼いで、北方はヴェテラ(Vetera)の本據からリッペ河(Lippe)に沿ひ南方はモゴンテアクム(Mogontiacum)今日のマイン河(Main)タウヌス(Tannus)方面に進み、北海の水路と并んで三方面から漸次蠻民を窮迫することとなつた。是に於て當時ウエーゼルの中流地方からエルベ河に互る一帶の地に占居して居つたチェルスキ族も、羅馬の武威に靡き其權勢の下に雖伏せざるを得なかつた。即ちドルツスは紀元前一年の第二回征討にリッペ流域から進んでウエーゼル中流にある彼等の占住地を劫し、越えて第四回の最後の征役(前九年)にはマインツを發してチャツ族(Chatti)の地を過ぎ、北に轉じてチェルスキを討伐し到處兵威を輝かして遂にエルベ河畔に達したが、歸路乘馬から墜ちて不慮の死を遂げた

のである。彼に代つてライン駐屯軍の統帥となつたチベリウスは其遺志を繼ぎ、紀元前八、七兩年に亙るゲルマニ内地の征服に由つてチエルスキ族に全く羅馬の宗主權を認めさすこととなり、帝國の威權はラインから遙に東方エルベの流域地方迄伸長する結果を齎した。紀元前六年チベリウスが任を罷めてから羅馬の對北蠻策が弛んで多少動搖を生じたが、やがて彼は再度統帥の地位に復し（紀元四年）新たに反覆恒なきゲルマニ諸部族を畏服せしめる必要からレギオン軍の精銳を率ゐて深く蠻地に侵入し、四年から六年に至る二回の征討にライン・エルベ間の蠻民を殆ど完全に歸服せしめることが出來た。今迄羅馬軍はヴェエテラに冬營を置き夏季蠻地の征伐に向ひ秋冷の近づく頃糧食缺乏を訴ふるに及んで必ず冬營即ちライン河畔の本據地に歸陣したのであるが、この四―五年の冬季に際してチベリウスは初めてゲルマニ内地のロッ

ペ河畔にあるアリソー（*Aliso*）に冬營を張つたのである。これは明に蠻地經營が大に進展の運に向つて來たことを示すもので、爾來従前の夏營地であつたアリソーが冬營地と變り、夏營は遙にチエルスキの本據なるウエーゼル河地方に置かれるのを常とすることとなつた。そこで是迄帝國北邊の武備に隔離して居る地の利を恃んで動もすれば背反の氣勢を示して居つたチエルスキ族も遂に全く隸屬の境地に陥るの已むなきに至り、他の西方諸部族と共に羅馬に對して補助兵を供する義務を負擔したのである。是に至つてライン・エルベ間に大ゲルマニヤ州を建て、今日のケルン市（*Köln*、當時 *Ara* と呼ぶ、即ちかのウビー族が附近部族の壓迫に堪へ兼ねラインを越えて遷住せる地で後年 *Colonia Agrippinensis* と稱せられて居る）に統治の中心を置いて、これをガリヤの支配から全く分離せしめようとする帝國の理想は正に實現される勢を呈したのである。此際ゲルマニ族の間に反羅馬思想民族的精神を鼓吹し反抗運動の中心

勢力となつたのは實にチエルスキ族であつて、この部民を代表したのは云ふ迄もなく古來民族的英雄と稱へらるゝアルミニウス(Arminius)其人である。

其頃ボヘミヤの地に諸部族を糾合して羅馬風に倣つた堅固な王國を建設して居つた古ゲルマニ族中の偉材マルコマンニ族(Marcomanni)のマロボヅース(Maroboduus)が兵備を整へて儼在して居るのは、帝國の大ゲルマニヤ經營に對する唯一の支障であつたので、チベリウスはこれを征服する爲にライン・ドナウ兩方面から十二軍團の大兵を擧げて進發することゝなつた。しかるに豫て羅馬人の支配に不満を懷いて居つたイリリヤ地方民が其虛に乗じて大叛亂を起したので、チベリウスは急遽マロボヅースと和を結び直ちに引返して其鎮定に當り、六年から九年に亙つて漸く反徒を壓服

することが出来たのである。このイリリヤ叛亂は帝國の大ゲルマニヤ經營事業に二重の損失を齎したやうである。即ち一面に於てイリリヤ住民の謀叛が北蠻諸族の反抗的氣勢を煽り民族の自覺を一層強からしめたと共に、他面にはこの暴動鎮壓の爲に帝國武方の精銳は漸くライン方面からドナウ方面に移り優秀な武將熟練な軍隊は主としてイリリヤ叛亂鎮定の任に廻されて居つたといふことである。搗て加へて凡庸非才なヴァルス(Quinctilius Varus)が六年以來ゲルマニヤ州の知事となり、前任地シリヤに於ける如き抑壓と誅求を旨とする州支配を不羈粗暴な北蠻の上に施したので、アルミニウスが率ゐて居つたチエルスキ族を中心とするゲルマニ人離反の氣運は須臾の間に醸成されたのである。九年の秋立つ頃ウエーゼル河畔の夏營に駐屯して居つたヴァルスは冬營地アリソンに還る準備を整へた際、附近蠻民の亂を耳にし、其

鎮定を志しつゝ迂回の途を取つて歸路を急いだ、時しも豫て手筈を定めて置いたアルミニウス等叛徒の首領等は途上陣營を脱出し、蠻民を率ゐて四方から羅馬軍を襲撃シタキッスの傳へて居るかの有名なトイトブルク森(Saltus Teutoburgensis)の窮地に困憊苦闘の極に達した三レギオンの兵を主將諸共全滅せしめた。この敗戦は確に帝國のゲルマニ征服事業の *Catastrophe* で、悲報に接した羅馬市上下の人心は雷火に打たれたやうに震駭したのも道理であらう。アルミニウスはこの一擧によつて永く民族精神の權化、ゲルマニ人の解放者と仰がるゝ榮譽を擅にすることになつたが、この偉人がなければ獨逸の國土民族はガリヤと同様に拉典化され了つたであらうと迄極言するのは元より吾人の贅せざる所である。トイトブルグ森の敗滅がなくても羅馬の大ゲルマニヤ經營の完成は至難

のことであつたらう。假令州支配が實現されてもそれは皮相に止まる丈で、ガリヤの場合のやうに全然征服の實を擧げ蠻民を徹底的に馴化することは結局不可能であつたに相違ないが、今はこの點に關する論議を避けて置かう。兎に角アルミニウスが當面の偉功は羅馬のライン以東に於ける從來の經營施設を殆ど全く滅却せしむることとなり、チベリウスの鍊達した善後の處置宜しきを得て帝國は辛うじて河畔一帶の境界線を維持することが出來たのである。

爾來アルミニウスを頭首に戴いて居るチエルスキ族の勢力は隆々として他部族を壓し、宛然ゲルマニ諸部の盟主として帝國の威權に對抗することとなつた。一四年アウグスツス帝殂落してチベリウスが其後を繼いでから、ドルツススの息ゲルマニクス(Germanicus Caesar)がライン駐屯軍の總指揮官となり、一旦中絶したゲルマニ本土の征略に

着手することゝなつたが、其の日指す對敵は云ふ迄もなくチェルスキ族であつた。タキッスは其年代記中に於て暗にゲルマニクスを理想の英雄と讚美して居る所から彼の企てた數度のゲルマニ征戰が赫々たる武功を齎したやうに傳へて居るけれども、其記事は或程度迄誇張されたもので信を置き難いことは學者の定説である。一六年の征討に諸部の蠻民を擧げて對戰したアルミニウス等を、ウエーゼル河の彼方に散々に撃破したといふ事實も頗る疑はしいものである。實際ゲルマニクスの征行は只羅馬軍の武威を蠻地に輝かしたといふ丈で、其成果は途中で遭遇した災厄と敵襲から蒙つた損失を償ふに足らなかつたやうである。それでチェルスキ族の勢威はこの壓迫によつて少しも失墜せなかつたのみか、ゲルマニクスの征討は寧ろ蠻族の結束を固くしアルミニウスの統合事業を助長せしめた觀がある。這般の真相は、ゲルマニク

スがアルミニウスの統率して居つた蠻軍を潰亂せしめたと傳へられて居る翌歲、即ち一七年に、アルミニウスはかの羅馬風王國の創建者として聲望彼と比敵したマロポッス王とエルペ・ザール (Selle) 兩河間の地に干戈を交へ、其勝敗は未決であつたが、彼の勢威敵を壓し流石の王を空しく本國に引回さしめ其の是迄培養した威力を全然失墜せしめたことによつて知られるのである。是に於て從來中立的態度を持し羅馬帝國の權威とアルミニウスの率ゐるゲルマニ諸族統合の勢力との中間に介在して忌憚の的となつて居つたマロポッスは失脚して國を逐はれ、アルミニウスの威望チエルスキ族の勢力獨り隆昌を極めた次第である。

二

以上はヴェレユス (Velleius Paterculus) テオカシウス (Dio Cassius) フロールス (Annus Florus)

タキツスなどの記述に基き、近時の諸研究⁽⁶⁾を參酌して、チエルスキ族興隆顛末を簡略に論述したのであるが、これによつてアルミニウスを中心とした該部族の活躍がいかに當時の一般形勢を支配したかが略ぼ會得されるであらう。ところが紀元二一年に及んでアルミニウスが同族の手に暗殺されてからはチエルスキの勢威頓に傾き、内争の頻發に伴ひ隣族チャツチやランゴバルチ(Langobardi)などの侵入を蒙り頽勢次第に甚しきを加ふるに至つたやうである。それでタキツスのゲルマニヤ志にはチエルスキ族の勢力が既に微々たる有様でチャウキ(Chauci)チャツチ兩強族の間に介在して僅に命脈を保つて居る有様を述べて、

ita qui olim boni aequique Cherusci, nunc inertes ac stulti vocantur.

されば嘗ては勇武と正義とを稱へられしチエルスキ人が、今は懶惰痴愚の徒と呼ばれるなり。

と迄極言して居るのである。一世紀末に書かれた、このゲルマニヤ志中に其名残を留めた許で、爾來チエルスキ族の名は歴史の表面から全く消滅し去つたのであるから、いかに少歳月の間に榮枯盛衰の激變がこの部族團體の上に行はれたかといふことが想像に餘りあるのである。チエルスキが斯様に急激な没落を遂げた原因は那邊に索むべきであらうか、これ本篇に於て余輩が聊か論じて見ようと思ふ所である。

タキツスは前掲ゲルマニヤ志の記事中に該部族衰微の因を説明して、⁽⁷⁾ *nimiam ac marcentem diu pacem inaccessiti nutrierunt*——久しく擾亂されて法外に緩怠なる平和を娛しむし——結果であると記して居るが、アルミニウス時代は勿論のこと其以後でも内訌鬪争絶間なく外敵の侵害もあつて中々緩怠な平和の夢を長閑に貪るやうな状態でなか

つたことは、後に引證する筈であるタキツスの年代記やチオ・カシウスの羅馬史などによつて明白に了知されるのである。只アルミニウス以後は羅馬帝國とは親善の關係にあつたから、タキツスはこの點からのみ推想を下して該族が永く平穩な生活を送つて來たやうに觀察したのであらう。それであるから安泰な生活狀態がこの部族を衰頽に導いたといふ證明は採るに足らないこと勿論である。しからば没落の眞因は那邊にあらうか、恐らく、それは羅馬の影響帝國の對蠻政策に由ることであらうと觀察されるのである。

ザアルスの敗滅で帝國の對北蠻事業は全く挫折したので、從來執つて來た積極的進取的政策は大體に於て放棄され、爾來主として消極的防衛策即ち邊境を固めて彼等のガリヤ及びドナウ河南地方侵入を防止するといふ方針が重要視されるやうになつて來たのである。勿論ゲルマニクスは前述の

やうに甚だ活潑な征討攻略をゲルマニ本土に試みて居り、其以後でもカリグラ帝(Caligula)やホルプロ將軍(Domitius Corbulo)や若くはドミチヤス帝(Domitianus)などが多少其ライン彼岸のゲルマニ諸族に對し攻勢進取の態度を示して居るのであつて、眞に防衛主義が確立したのはトラヤヌス帝以來のことであると斷じ得るのである。然しながら一般的傾向から云へばトイトブルグ敗戦以來帝國爲政者の大方針は消極策にあつたので、ゲルマニクスをライン軍司令の任から召還して、その征蠻事業を中止せしめた二代皇帝チベリウスは最も明白にこの主義を標榜して居るのである。而も狂暴な北蠻の患を除くには、單に邊境の守備を固くするのみでは策の得たものではない。進んで彼等の内部生活に干渉の手を加へて、これをして能く境上の防禦線を突破して帝國領を劫すやうな餘力を生ぜしめないことが肝要である。これが巧く

成功すれば、やがては更に一步を進めて兵刃の力を借らずに彼等の本土を征服し得ないとも限らないのである。チベリウス帝はこの蠻民制御の巧妙な奸手段を採用することとしたのであつて、其方

策は一面諸族間並びに諸族内部に於ける黨争を煽動し各部民をして互ひに相反噬せしめ、部族社會の結束を弛め不斷の鬭争に其力を消耗せしめると共に、他面に於て食欲飽くなき蠻民を南方開化の美味に誘ひ珍寶佳酒や金銀に其精神を盪惑せしめ素樸勇猛な性質を馴化するに勉めるのである。既にチベリウス帝は一六年の征戦後暫く休安を得て英氣を養うて居つたゲルマニクスに召還の命を發して、蠻夷の征服は武力よりも政略に依るべき旨を説き、

posse et Cheruscos ceterasque rebellium gentes, quando Romanae ultioni consultum est, interim discordiis relinqui.

チエルスキや其他の叛逆部族は、羅馬の貴爵が濟めば、内部の鬭争に打ち任せ置くべし。

と告げて、懷柔馴化と煽動教唆を骨子とする自己の對蠻策を仄めかして居るのである。かのマロボジース王が一九年に同族名門の一人なるカツアルダ(Catullus)の襲撃に遇ひ國を逐はれたのも、チベリウス帝の使賅に由つて居ることは、彼が元老院に於てなした言説によつて察知することが出来る。⁽¹⁾この政策は爾來永く帝國の對ゲルマニ方針として固く遵奉された所であつて、タキツスの如き正義を愛する人物でも其國家本位愛國主義の立場から、この危険な國敵に對しては斯様な誘惑煽動の策略を絶好の手段として居るのである。即ちゲルマニヤ志二三節並びに三三節に

si indulseris ebrietati suggerendo quantum concupiscunt, haud minus facile viuis quam

armis vincuntur.

若し飲醉を心任せて彼等の望むが儘に取らし興ふれば、武器を以てすると同じ容易さとして耽酒の邪行によりこれを征服し得べし。

*numeat, quasso, duretque gentibus, si non amor
nostri, at certe odium sui, quando urgentibus
imperii fati nihil iam praestare Fortuna natus
potest quam hostium discordiam*

冀はくば諸族絶えず永しへに必ず相嫉みてあれ、一吾人には好ましきことならねど一それは帝國の切迫せる時運に際しては敵方の軋轢に増す幸福を吾人に齎すものは他にあり得ざるを以てなり。

と述べられて居る。云ふ迄もなく前句は飲酒の誘惑を、後句は部族間鬭争の煽動を對北蠻策の絶好なるものとして推稱して居るのである。

斯様な羅馬帝國の方策はゲルマニ諸部族に對して尠からざる影響を及ぼしたのであつて、この誘惑策煽動策が、卓越した南方文化に接觸する所か

ら殆不可抗的に受ける自然的感化と相俟つて、彼等の社會生活に激變を與へ、部族の分裂崩壞を促し其政治的運命を危殆に導いたことも頻繁であつたやうである。而も是等諸部民の動靜を探求するに必要な唯一の史料たる帝國時代の諸記録は、これに對して極めて零細な斷片的事實を供給するのみで、其隆替興亡の跡を十分に推知することが出来ない。只チェルスキ族に至つては比較的帝國の史料が具つて居る早い時代に盛衰の急變に遭遇し其政治的運命を終始したのであるから、割合によく其真相を窺ふことが出来るのである。それでこの部族の興廢史が羅馬帝國の感化其對北蠻策の影響に攪弄されたゲルマニ族の運命を代表する最もチイビカルなものとして、以下少しく其事情を説いて見ようと思ふのである。

ゲルマニ族が帝國と接觸して彼我の交渉繁くなり、其武力の壓迫を蒙ると共に南方開明の習俗思想が入り込んで來ると、今迄單調であつた彼等の社會生活の間に自づと主義好尚の分立異同を生じ一方に革新派開化主義者が起ると共に他方に頑固派保守主義者が存立するといふのは當然の勢であつた。そこで前者は勢ひ親羅馬主義の傾向をとり後者は何うしても反羅馬思想を懷くこととなるのである。これと共に、彼等は帝國領と境を接して

既に任意の發展を阻止された所から、其經濟生活に土地定着の傾向土地利用法の進歩が促されて來るのであるが、其結果次第に原始時代の平等生活が打破され有力者の勢威が漸次加つて來て、是等貴族の間に烈しい競争が行はれるやうになつて來た。この有力者の勢力競争に前述のやうな開明保守兩派の反目が結びついてこゝに忌むべき軋轢闘争が生じて來たので、中にも手腕ある野心家は廣

大な土地多數の隨身を擁し、この黨派争を利用して其勢力發展を企てたやうである。羅馬の爲政者が利用を試みたのも亦この黨派對峙の形勢に乗じてのことであつて、財寶佳酒を遣はして巧みに親羅馬派を誘惑し、これを教唆して反對派と相闘はしめ、これによつて強大な部族の勢力を殺がしめたのである。チェルススキ族に於て這般の消息は最もよく窺はれるのである。

紀元初年頃羅馬の將軍ドミチウス・アヘノバルブス(Domitius Ahenobarbus)がゲルマニ内地に赴いた折、親羅馬主義を稱へた爲に國を追はれた數人のチェルススキ貴族を其本國に送還しやうとした趣がデオ・カシウスに記載されて居る。これによつて當時既に該族の間に黨争の端緒が開かれて居つたことを推察し得るのである。アルミニウスは若年で其弟フラヴィウス(Flavius)と共に羅馬に赴きチェルススキ族出身の補助軍を統率して居り、市民權

を得た上に騎士の階級 (equus Romanus) に列せられ羅馬名を名乗つて居り勿論ラテン語に通じ羅馬の戦術をも會得して居つたのである。それであるから彼自身は十分羅馬化された開明達識の人物であるが帝國の武威と開化に心酔するやうな親羅馬主義の徒黨に加はらないで、却て反撥的に民族的自覺心を懷き反羅馬派の頭目となり、當時漸く壓迫の度を加へて來た帝國の統治策に敵愾心の燃え立つて來た諸部民を糾合して羅馬の人心を驚倒せしめたやうな快學を敢行したのである。彼に對して親羅馬派を代表して居つたのは同族のセゲステス (Segestes) で、これも羅馬の市民權を有して居り九年の大反亂の勃發前にはヴァルスに對して陰謀の成立を告げ頻に警戒の語を寄せて居るのである。トイトブルグ戦以後アルミニウスの愛國黨とセゲステスの率ゐる羅馬黨との軋轢は日に烈しく一五年セゲステスは遂に邊境の一堡寨に反對派の

包圍する所となり、使者をゲルマニクスの陣營に派して救援を乞うた。ゲルマニクスは直ちに軍を發して其圍を解き、セゲステス初め多數の近親從者を救護して伴ひ歸つた。其中には名門の婦人達もあつた、殊にセゲステスの女でアルミニウスの妻となつて居るツスネルダ (Thuseida) が悲嘆に取亂した姿もなく從容として父に隨つて居つたのは衆目を惹いたやうである。セゲステスの子息セギムンツス (Seginthus) も是より先求援の使者に伴ひ來つて、ゲルマニクスの許に歸順して居つたのである。是等の一族は孰れも好遇を受け左岸の地に安住を許されたが、當時既にアルミニウスの胤を宿して居つたツスネルダは後にツメリクス (Thumelicus) と呼ぶ男子を生み落したと傳へられて居る。⁽¹⁾ゲルマニクスがこの年並びに其翌年大規模な對蠻征討の擧を決行したのは、全く羅馬に歸順したセゲステスの勸告に由つたので、帝國

に對して益反抗の氣勢を昂むるアルミニウス一派のチェルススキ人を撃滅するのを目的としたものであると推想される。それで彼はラインに近い不逞の蠻族を征服すべき當面の事業を差し置いて、専ら遠隔の地を討伐するのに其主力を注いだのであつて、これは確にセゲステス一派の離反に結束が弛んで居るチェルススキ族を潰亂せしめることが容易であらうと觀測したに由るものであらう。しかるに事實は豫期に反し、セゲステスの脱離とゲルマニクスの壓迫に刺戟されて、アルミニウス並びに其の叔父で内外に威望高きイングイオメルス (Inguimerus) のもとにチェルススキ並に諸部族の反羅馬同盟は益鞏固に組織され、部民到處に出沒して蠻地の行軍に惱む羅馬の將卒を脅し頑強な對抗を試みたので、華々しい遠征の壯舉も大體に於て失敗に了つたのである。

一六年の征討に、終始羅馬軍中に勤務して居つ

たアルミニウスの弟フラウグスはゲルマニクスの幕下に從軍して居つたが、一日ウエーゼル河を隔て、其兄と會見し互に激論を闘はした趣をタキッスが年代記中に傳へて居る。⁽⁵⁶⁾これは無論架空の話に相違ないけれども、當時に於けるゲルマニ族間の反羅馬主義と親羅馬思想とが、いかなる理由根據の下に存立し互に反目して居つたかといふことを寔に鮮明に表示して居るやうである。

Flumen Visurgis Romanos Cheruscosque
intherfluebat, eius in ripa cum ceteris primoribus
Arminius adstittit, quaesitoque an Caesar venisset? Postquam adesse responsum est, ut
liceret cum fratre colloqui, eravit. Erat is in
exercitu, cognomento Flavius, insignis fide et
anisso per vulnus oculo paucis ante annis,
duce Tiberio, tum permisum, progressusque

salutatur ab Arminio: Qui amotis stipulatoribus, ut sagittarii nostra pro ripa dispositi abcederent, postulat, et postquam digressi, unde ea deformitas oris? Interrogat fratrem. Illo locum et proclium referente: Quodnam praemium recepiisset? exquirit. Flavius aucta stipendia, torquem et coronam atque militaria dona memorat, iridente, Armino villa servitii pretia.

Exin diversi arduantur: Hic magnitudinem Romanam, opes Caesaris et victis graves potestas, in deditionem venienti paratam eminentiam: neque coniugem et filium eius hostiliter haberi: Ille fas patriae, libertatem avitam, penetratis Germania deos, matrem praecum sociam, ne propinquorum et adfinium, denique gentis suae desertor et proditor quam

imperator esse mallet. Paulatim inde ad iurgia prolapsi, quo minus pugnam consererent, ne flumine quidem interiecto cohibebantur, ni Stertinius adurens plenum irae armaque et equum poscentem Flavium atlinuisset. Cecebatatur contra munitabundus Arminius proeliumque dennuntians. Nam pleraque Latino sermone intericiebat, ut qui Romanis in castris ductor popularium meruisset.

タハムスキヤン、ウホーセルの河水羅馬人とチハムスキ人との間を流れたり。其岸邊にマルキニウスは他の首領達と共に立ちあがり、ザル來わりの舌を問ふ。到着の答めを、其弟と會見の許を乞ひぬ。その者は吾軍隊に在り、フラーツヌと名附け、忠勳を以て顯れ、數年前チハムスキヤン統率の時負傷の爲に一眼を失へり。かくて許答を得、彼は進みてマルキニウスより會釋を受へ、マルキニウスは其隨身を退け吾が岸邊に配置をわし射手を去らしめんことを要求せり、彼等が退去せる後、いかにして不具となりしを、弟に向いて問ひぬ。實徳の地點戰場の功を告ぐるや、彼はいかなる報酬を受けたるかを問ふ。フラーツヌが増給

のこと頭、鍵、王冠、其他種々なる兵械の賜物を述べ擧ぐるを聞きつつ、アルミニウスは謙虚に對する斯の如き些少なる報償を愚弄せり。

それより抗論は開かれぬ。此方は羅馬の偉大ケーザルの資力、その被征服者に對する怖るべき處罰降服者に對する即時の懲罰、彼の(アルミニウスを指す)妻や子息を敵として取扱はざりしことを辨すれば彼方は祖國天賦の權利祖先傳來の自由ゲルマニヤ本土鎮座の神々弟が一族近親殊更に部民の支配者とはならず、脱走者たるに至らざれと共々に祈願を籠むる母のことを説き立てたりかくて次第に彼等は激論に馳せ、ステルチニウス(羅馬方の武將)が驅け來りて憤怒に充ち武器と軍馬を求むるフラウグスを抑へ制めざりしならば彼等の間を流るゝ河水すらも、相寄つて鬭争に訴ふるを阻み得ざりしならん。アルミニウスは彼を威嚇して頻に圍ひを挑みつつある状見ゆ。彼は其部民を統率して羅馬の陣營に勤務せし故に、主としてラチン語をもて談論を遣れり。

ゲルマニクスが召還されてから、チュエルスキ族は反羅馬主義の頭目アルミニウスを仰いで愈々隆々たる勢を示して居つたが、帝國の壓迫が罷むと

彼等の間に漸く黨争の餘燼が再燃し來り、チベリウスの煽動策が是に加勢を添へたと見えて、アルミニウスは遂に紀元一九年其近親の手に暗殺されたのである。タキツス年代記に據ればこれより先アルミニウスの家と姻戚關係にあつたチャツチ族の首長アドガンデストリウス(Ardagandestrinus)が書を羅馬に送つてアルミニウスを殺害する用に供する毒藥を贈られんことを要求して居る。フラウグス並びに其兄弟なるセシタクス(Sesithacus)の妻は共にこの家の女であり、(Catumenus及びTercio menusを各其父として居る)兩族は常に相呼應して羅馬に當つて居つた間柄であるが、チャツチ族長はアルミニウスの權勢獨昌なるを觀て遂にこれを嫉視し羅馬に和親を示して陰謀を廻らして居つたものと思はれる。これによつて帝國が絶えず蠻族内の親羅馬派と氣脈を通じ黨争を煽つて居つた

ことが推想される。

其後チェルスキ部族内に於ては極めて激烈な黨派間の鬭争が續いたと見えて、紀元四七年には内争の爲名門の血統が全く斷絶したので、帝國に對し王たるべき人物を求めると至つた。そこで時の皇帝クラウヂウスはフラヴィグスの子に當るイタリクス (*Italicus*) と呼ぶ端麗にして武技に秀でた青年に資財從者を附與して其國土に赴かしめた。優れた文明の雰圍氣中に養はれた彼は當初部民一般に歡迎されたが、殊に南方から傳へ來つた佳酒の飲酔や種々の歡樂は最も蠻人を喜ばしめたもの (*vinolentiam ac libidones, grata barbaris, usurpans*) であらうと想像される。而もこのイタリクス派遣で羅馬は其蠻民誘惑策を十分に成し遂げ得たのであつて、チェルスキ族にとつては永年の鬭争に氣力を消耗した上に、この誘惑に遇ひ益衰頽墮落の

淵に沈んで行かざるを得ない運命を與へられた譯である。さればこそ、やがて反羅馬黨が彼を惡んで國土を去り同志を募つて入寇したが、イタリクスは幸ひにこれを撃退し、後更に國人に其專制を忌まれ王位を退けられランゴバルチ族の援助によつて回復することが出來たのを、タキツスは評して「順境に於ても逆境に於てもチェルスキ人の爲に不幸を齎せり」 (*par liceta, par adversa res Chiriscas afflictabat.*) と記して居るのである。ドミチアヌス帝の治世になつて多分イタリクスの子と思はれるチャリオメルス (*Chalioerius*) が羅馬に親近な所からチャツチ族に國を逐はれ、後再擧を企て位を復し得たけれども、やがて部民の反抗を惹起し羅馬に救援を乞ふたが、帝は別段兵力の援助を與へず資金を給した許であつたことがデオ・カシウスに見えて居る。⁽²¹⁾

以上述べたやうに、チェルスキ族は偉材アルミニウスの方で一時威望高く民族運動の中心となつたけれども、夙くから相對峙して居つた親羅馬黨民族主義派反目の氣勢が、帝國の煽動政策に乗せられて同族相喰み相屠るの慘劇を繰返すこととなり、徒に部族の活氣を消耗した上に、南方文化の誘惑に遇ひ素樸剛健の質を軟化せしめたので遂に衰頽没落を來たした次第である。この部族が衰微に傾いてからはチャツチ族が暫く優勢を示し、チェルスキの領土を壓迫し羅馬の威權に反抗して民族主義の代表者たる觀を示すのである。要するにチェルスキ族は帝國の對ゲルマニ政策に仆れた最初の犠牲者と見做すべきものであらう。(完)

- (1) *Jelio gallico*, VI, 10.
- (2) *Vellejus Paternicus*, II, 108, 9. *Strabo* VII, 1.
- (3) *annales*, I, 60.
- (4) *Suetonius*, *Augustus* c. 2, 3.
- (5) *Ludwig Schmidt*, *Allgemeine Geschichte der ger*

manischen Völker, S. 166; *Hans Delbrück*, *Geschichte*

hieder Kriegskunst, Teil II, S. 92 ff.

(6) *M. Munsen*, *Mittelenhoff*, I. *Schmidt*, *Delbrück* etc.

(7) *Germania* c. 36.

(8) *Ibid.*

(9) *Dio Cassius* LXV, 21, 22; *Suetonius*, *Cajus Caligula* c. 43—51; *annales* XI, 18—20; *Dio Cassius*, LXVII, 4—7; *Suetonius*, *Domitianus* c. 6.

(10) *annales* I, 26.

(11) *Ibid* II, 63; *Suetonius*, *Tiberius* c. 37.

(12) *Dio Cassius* LV, 11.

(13) *Florus* IV, 12; *Vellejus Paternicus* II, 118; *annales* I, 58.

(14) *Strabo* VII 1; *annales* I, 57, 58.

(15) *annales* II, 9, 10.

(16) *Ibid* II, 88.

(17) *Strabo* VII, 1; *annales* XI, 16.

(18) *annales* XI, 16.

(19) *Ibid.*

(20) *Ibid* XI, 17.

(21) *Dio Cassius* LXVII, 5.